



Title	1918年総選挙二人区における自由党と労働党：労働党が議席を獲得できなかった選挙区
Author(s)	岡田，新
Citation	大阪大学英米研究. 2019, 43, p. 1-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99429
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1918 年総選挙二人区における自由党と労働党

－労働党が議席を獲得できなかった選挙区－

岡田 新

1

後世から見れば、1918 年総選挙は、自由党の衰退と労働党の勃興の画期であった。ロイド・ジョージ (Lloyd George) 率いる連立政権派与党と、これに与しないアスキス (H. H. Asquith) 派野党に分裂した自由党は、この総選挙で歴史的な敗北を喫し、以後二度と政権を取ることはおろか、野党第一党になることも叶わなかった。他方労働党は、この総選挙で初めて全国的に候補者を立てて争い、記録的な得票数を獲得、その後わずか 6 年余りで大英帝国の政権の舵を握ることになる。ただし議席数の上では、1918 年総選挙での労働党の戦果は、19 議席増にすぎず、決して目を見張るようなものではなかった。労働党は野党第一党になったものの、その地位は決して盤石なものではなかった。事実、1920 年代を通じて、自由党と労働党のせめぎ合いが続く。1918 年総選挙の結果を、労働党の躍進と捉えることに疑問を呈する見解があるのは、このためである。

しかし選挙の歴史という観点から見れば、1918 年総選挙を境にエドワード時代の選挙を彩っていた自由党と労働党の同盟関係が崩壊し去ったことは否定できない。エドワード時代には、自由党と労働党は、選挙協定に基づいてかなりの数に上る二人区で、保守陣営に対抗し、二票制の制度を利用して議席を分け合っていた。こうしたエドワード時代の構図は、1918 年総選挙では自由党の分裂によってすっかり姿を消した。その意味で選挙の歴史にお

いて、1918 年総選挙は大きな分水嶺をなしていた、と言わねばならない。

筆者は前稿で、1918 年総選挙の二人区のうち、労働党候補が議席を制した 4 つの選挙区に焦点を当て、前後の総選挙の結果と比較し、労働党の勝因の分析を試みた。この 4 つの選挙区に関する限り、第一次大戦前の自由党との同盟関係を継承することが、労働党の勝利に貢献したと考えられることを指摘した¹。

では他の二人区ではどうだったのか。これ以外の選挙区では、労働党と自由党の同盟関係がもともと十分な地歩を固めていなかったのであろうか。それともこうした選挙区では、1918 年の選挙において、労働党の前進を妨げる要因が働いていたのでであろうか。本稿では、前稿の分析を引き継ぎ、こうした観点から、労働党候補が議席を奪い取ることができなかった二人区の戦況を検討することとしたい。

本稿での分析の対象は、グレート・ブリテン、つまりアイルランドを除いたイングランド、スコットランド、ウェールズの二人区である。アイルランド独立を叫ぶシン・フェインが南部を席卷したアイルランドは、ここでの考察の対象の外に置く。グレート・ブリテンの選挙区のうち、圧倒的多数を占めたのは、567 の選挙区の一人区であった。だがそれ以外に、12 の二人区と 4 つの大学選挙区があった。二人区は、数こそ少なかったものの、エドワード時代の労働党と自由党の同盟の主な舞台であり、二人区については、二票制の票の行方についての記録が残されている。このため二人区の分析は、投票行動の分析の対象として、極めて重要な意味を持っている。

この 12 の二人区における政党の対決の構図とその勝敗は、表 1 に掲出した通りである²。この内、4 つの選挙区ーボルトン (Bolton)、ダービー (Derby)、ダンディー (Dundee)、プレストン (Preston) では、労働党の候補が議席を奪い取るのに成功した。残りの 8 つの選挙区の内、3 つの選挙区ーロンドンのシティ (City of London)、ノレッジ (Norwich)、ストックポート (Stockport) では、1918 年には労働党の候補は立候補しなかった。残りの 5 つの選挙区ーブラックバーン (Blackburn)、ブライトン (Brighton)、オ

ルダム (Oldham)、サザンプトン (Southampton)、サンダーランド (Sunderland) は、労働党の候補が立候補したが、議席に手が届かなかった選挙区である。

本稿では、労働党が不戦敗となった 3 選挙区と労働党候補が敗北した 5 選挙区に視点を集め、1900 年以来の総選挙の戦況を検討し、労働党と自由党の同盟の基盤がエドワード時代に存在していたかどうか、存在していたとすれば、1918 年総選挙ではそれはどのように変化したのか、という点に焦点

表 1 1918 年総選挙における二人区の政党別立候補者数と当選者数

	連立諸派	連立派以外 の保守党	(非連立派) 自由党	(非連立派) 労働党	諸派 無所属	計
Blackburn	2(2)			1		3(2)
Bolton	1(1)			1(1)		2(2)
Brighton	2(2)			2		4(2)
City of London	2(2)					2(2)
Derby		1(1)	1	1(1)	1	4(2)
Dundee	1(1)			2(1)	1	4(2)
Norwich	1(1)		1(1)		1	3(2)
Oldham	2(2)		1	1		4(2)
Preston	2(1)		1	1(1)		4(2)
Southampton	2(2)	1		2		5(2)
Stockport	2(2)					2(2)
Sunderland	1(1)	1(1)		1		3(2)
総計	18(17)	3(2)	4(1)	12(4)	3	40(24)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。ただしアイルランドと大学選挙区を除く。拙稿「自由党の分裂と労働党－1918 年総選挙二人区の戦況－」『英米研究』大阪大学英米学会、41 号 2017 年 所収より再録。
2. 1918 年総選挙特有の情勢を概観するためにこの表では、連立派政党（連立派保守党、連立派自由党、連立派労働党）を一括して表示している。1900 年から 1923 年の選挙情勢を鳥瞰する以下の表では、連立諸派は「その他」に分類している。
3. 数字は立候補者数を、括弧内の数字は当選者数を示す。
4. 連立諸派とは、ロイド・ジョージから信任状を受け取った保守党、自由党、労働党の候補を指す。

を当てて分析を試みたい³。

2

まず 1918 年総選挙で労働党の候補が立候補せず、不戦敗に終わった選挙区の戦況を分析することにしよう。最初に世界的な金融街であるロンドンのシティ選挙区を見てみよう。表 2 から分かるように、シティ選挙区では、第一次大戦前の総選挙では、自由党と労働党の間の同盟関係自体、全く機能していなかった。この選挙区では、労働党の候補が 1900 年以來立候補したことは一度もなかった。それどころか保守党以外の候補は、1906 年の補欠選挙で自由貿易派 (Free Trader、表 2 ではその他候補に分類されている) が獲得した 21.1% の得票が最高の記録であり、それ以外の選挙では、自由党の候補は出馬しても 10% 台の得票率にとどまり、議席に届く可能性は乏しかった。当選の可能性が低いため、保守党に対立候補が挑戦することそのものが困難であり、1900 年と 1910 年 12 月の総選挙では、保守党候補が無投票で 2 議席を独占している。1918 年総選挙でも、連立派保守党の候補二人が無投票で当選となった。1922 年の補欠選挙でも、保守党と保守系の無所属候補二人が無投票当選し、1922 年、1923 年の総選挙でも、保守党候補が無投票で議席を得ている。このようにシティ選挙区は、極めて強固な保守党の地盤であり、労働党はもちろんのこと自由党にも議席を争う力はほとんどなかった。労働党が、エドワード時代の労働党と自由党との同盟関係を利用する手がかりは、ここにはなかったと言ってよい。

次にストックポート選挙区を取り上げよう。この選挙区でも、1918 年総選挙は、連立派の候補の無投票当選に終わった。しかしこの選挙区の状況は、シティとは全く異なっている。表 3 は、ストックポート選挙区の 1900 年総選挙から 1910 年 12 月選挙までの選挙結果を掲出したものである。一瞥して分かるように、このストックポート選挙区では、保守党が全国的には圧勝をおさめた 1900 年総選挙でも、自由党が 2 議席を独占している。つまり

表 2 ロンドン・シティ選挙区の党派別得票数
1900 年－1910 年 12 月総選挙

年	保守党 (統一党)	保守党 (統一党)	自由党	自由党	その他
1900	unopposed	Unopposed			
1904 補選	unopposed				
1906 16019	(38.0) 15619	(37.2) 5313	(12.7) 5064	(12.1)	
1906 補選	15474 (78.9)				4134 (21.1)
1910. 01	17907 (45.0)	17302 (43.4)	4623 (11.6)		
1910. 12	unopposed	Unopposed			
1918	unopposed	unopposed			
1922 補選	unopposed				unopposed
1922	unopposed	unopposed			
1923	unopposed	unopposed			

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, Chichester, second edition, 1989) および F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各党派の得票率を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。unopposed は無投票当選を示す。
4. 1906 年の補欠選挙での保守党候補の対立候補は、Free Trader の候補である。
5. 1918 年の候補はいずれも連立派保守党の候補である。
6. 1922 年の補欠選挙のその他の候補者は保守系無所属の候補である。
7. 1910 年 12 月総選挙と 1918 年総選挙は全く異なった選挙制度のもとで行われた総選挙であるため、両者の間に一線を画して表記している。

この選挙区は、シティとは対照的に、自由党が強固な地盤を持つ選挙区であった。そして 1906 年総選挙以降、1910 年 1 月総選挙と 1910 年 12 月総選挙では、自由党と労働党が保守党に対抗して議席を分け合う典型的なエドワード時代の自由党と労働党の同盟関係が成立していた。

しかし 1918 年総選挙では、ここで労働党は議席を得ることはできなかった。そこには、この選挙区固有の事情が働いていた。実は 1910 年 1 月、12

表 3 ストックポート選挙区の党派別得票数
1900 年—1910 年 12 月総選挙

年	保守党 1	保守党 2	自由党 1	自由党 2	労働党 1	労働党 2	その他 1	その他 2	その他 3
1900	5377 (25.2)	5098 (23.9)	5666 (26.5)	5200 (24.4)					
1906	4591 (20.4)	4064 (18.1)	6544 (29.1)		7299 (32.4)				
1910. 01	5268 (22.1)	5249 (22.0)	6645 (27.9)		6682 (28.0)				
1910. 12	5234 (23.1)	5183 (22.9)	6169 (27.1)		6094 (26.9)				
1918							un- opposed	un- opposed	
1920 補選 (欠員 2)					16042 (18.0)	14434 (16.2)	22847 (25.7)	22386 (25.1)	3 候補 計 13423 (15.0)
1922	33852 (33.1)				16126 (15.8)	17059 (16.7)		35241 (34.4)	
1923	20308 (22.4)	18129 (20.0)	19223 (21.2)	16756 (18.4)	16340 (18.0)				

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, Chichester, second edition, 1989) および F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各党派の得票率を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。
4. 1918 年のその他候補 1 は連立派自由党の候補、その他候補 2 は連立派労働党の候補である。
5. 1920 年の補欠選挙は、1918 年総選挙で当選した連立派自由党の議員が死去し、連立派労働党の議員が辞職したことによって欠員 2 名を埋めるために行われた。その他の候補 1 は連立派保守党の候補で、その他候補 2 は連立派自由党の候補である。その他候補 3 には、3 人の無所属候補の票を掲出している。労働党の候補は、厳密には労働党と協同組合党 (Co-operative Party) の共同候補である。
6. 1922 年の保守党候補は、1920 年の補欠選挙で当選した連立派保守党の議員 W. Greenwood であり、その他候補 2 は、1920 年にその他候補 2 の連立派自由党として立候補し当選したが今回は国民自由党の候補となった H. Fildes を指す。労働党候補 2 は 1920 年と同じく厳密には労働党と協同組合党の共同候補である。
7. 1923 年の自由党候補 2 は、1922 年に国民自由党から当選した H. Fildes である。
8. 1910 年 12 月総選挙と 1918 年総選挙は全く異なった選挙制度のもとで行われた総選挙であるため、両者の間に一線を画して表記している。

月総選挙で当選した自由党のヒューズ (S. L. Hugues) 議員と、1906 年総選挙以来議席を守っていた労働党のワードル (G. J. Wardle) 議員が、1918 年総選挙では、それぞれ連立派の自由党、そして数少ない連立派の労働党候補として立候補したのであった。1918 年総選挙では、長いキャリアをもつ二人の現職議員に対して、連立政権に与しない非連立派の自由党も連立政権に与しない労働党の主流も、対抗馬を立てることができずに不戦敗に終わったのである。

このストックポート選挙区では、1920 年に連立派自由党の議員が死去し、連立派労働党の議員が辞職したことで欠員 2 名を埋めるために補欠選挙が行われた。非連立派の労働党は、連立派保守党と連立派自由党の後継候補に対抗馬を擁立した。しかし非連立派の労働党の二人の候補は、結局共倒れに終わる。1922 年の総選挙でも、保守党と国民自由党の候補に、非連立派の労働党は 2 人の候補を立てて挑んだものの議席に届かなかった。1923 年の総選挙でも、自由党の候補が 2 人、労働党の候補が 1 人立候補して、2 人の保守党候補に挑戦した。自由党候補はかろうじて接戦を制して保守陣営から 1 議席を奪ったが、労働党は最下位に低迷した。1918 年総選挙で、自由党と労働党の現職議員が連立派から立候補したこの選挙区では、非連立派の自由党と労働党は結局、エドワード時代の同盟関係が培った選挙基盤を活かすことができなかったのである。

二票制の分析を通して、この点をもう少し掘り下げてみることにしよう。1918 年総選挙は無投票だったため、二票制の分析をすることはできない。しかし 1910 年 12 月の総選挙と 1920 年の補欠選挙については、二票制の票の行方についての記録が残っている。表 4、表 5 はそれを掲出したものである。(ただし 1920 年の補欠選挙については、一部しか記録が残っていない。) これを見ると、1910 年 12 月の総選挙では、労働党と自由党の支持者のうち、それぞれ 91.48% と 90.37% が双方の候補者にペアで投票している。エドワード時代の堅固な両政党の支持者の協力関係がここにはっきりと示されている。ちなみに保守党の二人の候補の支持者も、それぞれ 94.31% と

表 4 1910 年 12 月総選挙ストックポート選挙区における二票制の分析

	単独	保守党 1 との組み票	保守党 2 との組み票	自由党 との組み票	労働党 との組み票	計
保守党 1	78 (1.49)		4936 (94.31)	132 (2.52)	88 (1.68)	5234 (100.00)
保守党 2	70 (1.35)	4936 (95.23)		94 (1.81)	83 (1.60)	5183 (100.00)
自由党	368 (5.97)	132 (2.14)	94 (1.52)		5575 (90.37)	6169 (100.00)
労働党	348 (5.71)	88 (1.44)	83 (1.36)	5575 (91.48)		6094 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

表 5 1920 年補欠選挙ストックポート選挙区における二票制の分析

	単独	その他 1 連立保守 との組み票	その他 2 連立自由 との組み票	労働党 1 との組み票	労働党 2 との組み票	その他 無所属 3 候補	計
その他 1 連立保守	258 (1.13)		21172 (92.67)	N/A	N/A	N/A	22847 (100.00)
その他 2 連立自由	192 (0.86)	21172 (94.58)		N/A	N/A	N/A	22386 (100.00)
労働党 1 1	396 (2.47)	N/A	N/A		13529 (84.33)	N/A	16042 (100.00)
労働党 2	84 (0.58)	N/A	N/A	13529 (93.73)		N/A	14 434 (100.00)
その他無 所属3候補	1443 (10.75)	N/A	N/A	N/A	N/A		13423 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。
4. N/A は記録が残っていないことを示す。

95.23% がペアで投票をしている。ところが 1920 年総選挙では、労働党の 2 人の候補の支持者は、それぞれ労働党の別の候補に 84.33%、93.73% がペアで投票しているのに対し、連立派の保守党と連立派の自由党の支持者の側も、92.67%、94.58% がお互いにペアで投票していることが分かる。つまり 1920 年総選挙の時点では、連立派の保守党と連立派の自由党の支持者は、ほとんど一体になって投票しており、連立派の 2 人の候補と非連立派労働党の 2 人の候補は、有権者を燦然と二分していた。言い換えれば労働党は、連立派保守党と連立派自由党の支持者にほとんど食い込むことができなかったことが分かる。

こうした分析からみると、ストックポート選挙区について言えば、エドワード時代の自由党と労働党の同盟関係は極めて強固であったが、1918 年総選挙で自由党労働党の現職が、連立派から立候補し、反連立派の陣営が不戦敗を余儀なくされた後、反連立派の自由党労働党は、以前の同盟関係の遺産を活かすことができなかったことが判明する。

だがこのカテゴリーでさらに興味深い事例は、ノレッジ選挙区である。表 6 に掲げたように、この選挙区では、1900 年には保守党の候補が無投票で 2 議席を独占していた。しかし 1904 年の補欠選挙では保守党候補に対抗し、自由党に加えて労働党からも候補が立ち、自由党候補がかなりの票を取り、労働党候補の得票を加えれば、保守党を打ち負かすことができる可能性があることが示された。事実、自由党による自由貿易擁護のキャンペーンが功を奏した 1906 年総選挙では、自由党と労働党の候補が見事に票を分け合い、両党で議席を分け合う形になった。1910 年 1 月、1910 年 12 月の総選挙でも、ほぼ同じパターンが繰り返されている。この結果から見ると、ノレッジは、エドワード時代の自由党と労働党の同盟関係を典型的に表した選挙区の一つであったと言える。戦時中に行われた 1915 年と 1917 年の補欠選挙でも、議席を占めていた自由党と労働党の候補がすんなりと議席を継承しており、戦争中の政党間の政治休戦があったとはいえ、両党の協力関係が戦時中も一応維持されていたことが分かる。

表 6 ノレッジ選挙区の党派別得票数
1900 年—1910 年 12 月総選挙

年	保守党 1	保守党 2	自由党 1	自由党 2	労働党 1	労働党 2	その他 1	その他 2
1900	unopposed	unopposed						
1904 補選	6756 (48.3)		6756 (38.0)		2440 (13.7)			
1906	7460 (25.3)		1972 (37.2)		11059 (37.5)			
1910. 01	8410 (21.7)	79081 (20.6)	11257 (29.0)		11119 (28.7)			
1910. 12	7758 (27.8)		10149 (36.4)		10003 (35.8)			
1915 補選			unopposed					
1917 補選					unopposed			
1918			25555 (43.1)				26642 (45.1)	6856 (11.6)
1922					15609 (16.9)	14490 (15.7)	31167 (33.7)	31151 (33.7)
1923	14749 (15.3)	12713 (13.2)	16222 (16.9)	13180 (13.7)	20077 (20.9)	19304 (20.0)		

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) および F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各党派の得票率を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。unopposed は無投票当選を示す。
4. 1918 年のその他候補 1 は、連立派労働党に所属する G. H. Robert を示し、自由党の候補は連立政権の支持者 E. H. Young を指す。またその他候補 2 は、労働党系の無所属候補であった。
5. 1922 年のその他候補 1 は、1918 年には連立派労働党候補として立候補当選し、1922 年には無所属として立候補した G. H. Robert を指す。その他候補 2 は、1918 年には連立政権を支持する自由党候補として立候補当選し、1922 年選挙ではロイド・ジョージ率いる国民自由党 National Liberal から立候補した E. H. Young である。
6. 1923 年の労働党の候補はいずれも新人。一方 1918 年に無所属から立候補した候補 G. H. Robert は、1923 年には保守党候補 1 として保守党から立候補して落選。1918 年に国民自由党から立候補した候補 E. H. Young も、自由党候補 1 として自由党から立候補したが落選した。
7. 1910 年 12 月総選挙と 1918 年総選挙は全く異なった選挙制度のもとで行われた総選挙であるため、両者の間に一線を画して表記している。

しかし 1918 年総選挙では、労働党はこうした以前の自由党と労働党の同盟関係をうまく継承することはできなかった。その背景には、この選挙区が直面した特別な状況があった。表 6 の注で指摘しているように、1918 年総選挙では、1906 年総選挙から議席を持ち、1910 年の二度の総選挙でも議席を維持してきた労働党の現職ロバーツ (G. H. Roberts) が、数少ない連立派労働党の候補として立候補したからである。また 1915 年の補欠選挙から議席についていた自由党の現職ヤング (E. H. Young) も、一応アスキス派の自由党に席を置きロイド・ジョージのクーポンを受け取ってはいなかったものの、アスキスと異なって公然と連立政権を支持していた。従って 1918 年総選挙で、連立派に正面から対抗する候補は、労働党系の無所属の候補であったヴィタード (Witard) だけだった。しかしヴィタードは、現職議員二人に全く歯が立たなかった。

ここで注目されるのは、連立派労働党と連立派政権を支持する自由党候補に対して、連立派があえて対抗馬を立てなかったことである。連立派一とりわけ連立派の保守党が対立候補を擁立しなかったことによって、ノレッジ選挙区では、連立派労働党と連立政権を支持する自由党の候補が、保守陣営の支持者から労働党の支持者に至る極めて広範囲な支持者から票を集めることができる状況となった。事実、この二人の候補は合計すると、88.4% にのぼり、この二人は言わば大政翼賛会的な支持を享受した。

表 7、8、9 はこのノレッジ選挙区での、1918 年、1922 年、1923 年の二票制の票の行方を分析したものである。表 7 から分かるように、1918 年総選挙では、連立政権支持の自由党候補と、連立派労働党候補の票は、それぞれ 89.37%、93.18% がお互いをペアとして投票した票であった。エドワード時代の労働党と自由党の密接な協力関係に匹敵するような支持者の固い結束が、連立政権支持の二人の候補の支持者に観察されたことになる。1922 年総選挙でも、この 2 人の候補は無所属あるいは国民自由党から立候補し、やはり 94.62%、94.57% がお互いをペアとした票を獲得している。表 8 が示しているように、1922 年総選挙で彼らに対抗して立候補した非連立派の労働

表 7 1918 年総選挙ノレッジ選挙区における二票制の分析

	単独	自由党 との組み票	その他 1 との組み票	その他 2 との組み票	計
自由党	1264 (4.95)		23811 (93.18)	1449 (5.67)	25555 (100.00)
その他 1	1382 (5.19)	23811 (89.37)		480 (1.80)	26 642 (100.00)
その他 2	4927 (71.86)	1449 (21.13)	480 (7.00)		6856 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 自由党は連立政権の支持者 E. H. Young を、その他 1 は連立派労働党に所属する G. H. Robert、その他 2 は労働党系の無所属候補を指す。
4. 網掛けは当選者を示す。

表 8 1922 年総選挙 ノレッジ選挙区における二票制の分析

	単独	労働党 1 との組み票	労働党 2 との組み票	その他 1 との組み票	その他 2 との組み票	計
労働党 1	440 (2.82)		13835 (88.63)	767 (4.91)	567 (3.63)	15609 (100.00)
労働党 2	111 (0.77)	13835 (95.48)		349 (2.41)	195 (1.35)	14490 (100.00)
その他 1	577 (1.85)	767 (2.46)	349 (1.12)		29474 (94.57)	31167 (100.00)
その他 2	915 (2.94)	567 (1.82)	195 (0.63)	29474 (94.62)		31151 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。
4. その他候補 1 は、1918 年には連立派労働党候補として当選し、1922 年には無所属として立候補した G. H. Robert を指す。その他候補 2 は、1918 年には連立政権を支持する自由党候補として当選し、1922 年選挙ではロイド・ジョージ率いる国民自由党 National Liberal から立候補した E. H. Young である。

表 9 1923 年総選挙 ノリッジ選挙区における二票制の分析

	単独	保守党 1 との 組み票	保守党 2 との 組み票	自由党 1 との 組み票	自由党 2 との 組み票	労働党 1 との 組み票	労働党 2 との 組み票	計
保守党 1	321 (2.18)		12112 (82.12)	1867 (12.66)	64 (0.43)	285 (1.93)	100 (0.68)	14749 (100.00)
保守党 2	104 (0.82)	12112 (95.27)		304 (2.39)	28 (0.22)	82 (0.65)	83 (0.65)	12713 (100.00)
自由党 1	352 (2.17)	1867 (11.51)	34 (0.21)		12765 (78.69)	726 (4.48)	208 (1.28)	16222 (100.00)
自由党 2	75 (0.57)	64 (0.49)	28 (0.21)	12765 (96.85)		102 (0.77)	146 (1.11)	13180 (100.00)
労働党 1	294 (14.65)	285 (1.42)	82 (0.41)	726 (3.62)	102 (0.51)		18588 (92.58)	20077 (100.00)
労働党 2	179 (0.93)	100 (0.52)	83 (0.43)	208 (1.08)	146 (0.76)	18588 (96.29)		19304 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

党の 2 人の候補は、88.63%、95.48% が労働党同士でペアを組んだ票を獲得しているが、連立派の 2 人の候補の支持者からはネグリジブルな票しか獲得できなかった。1923 年総選挙に至って初めてこうしたパターンが崩れ、保守党、自由党、労働党から二人ずつの候補者が出馬した乱戦となり、労働党以外の票が分散されることで、労働党の二人の候補は、保守党、自由党との競い合いを抜け出て議席を獲得することに成功した。ただし表 9 から判明するように、1923 年総選挙の時点でも、自由党と労働党の票の重なりは、わずかに 0.77%、1.11%、1.18%、4.48% に過ぎず、この選挙区では、労働党はかつてのエドワード時代の自由党の支持層を取り込むことはできなかったことが分かる。

3

次に、労働党の候補が立候補したものの、議席に届かなかった 5 つの選挙区を分析の対象としよう。このうちブライトン、オルダム、そしてサザンプトンでは 1900 年総選挙から 1910 年 12 月総選挙まで労働党の候補は出馬していなかった。こうした選挙区では、エドワード時代の自由党と労働党の同盟は、少なくとも選挙という表舞台では機能していなかったと言わねばならない。

まずブライトンを見てみよう。表 10 から分かるようにブライトン選挙区では 1900 年から 1910 年 12 月の総選挙まで、保守党と自由党の争いが続いており、労働党は一度も候補者を立てていない。1918 年総選挙に至って初めて労働党は候補者を擁立した。しかし連立派保守党の二人候補の三分の一にも満たない票しか取れなかった。表には提出していないが 1922 年の総選挙では、労働党は候補者を立てられず、1923 年総選挙では労働党は二人の候補を立てたものの、やはりそれぞれ 10% にも満たない得票率で惨敗に終わっている。つまりこの選挙区ではエドワード時代の自由党と労働党の同盟は機能していなかった。労働党は 1918 年総選挙になって初めて議席に挑戦したが、議席を争うような地盤は持っていなかった。

オルダム選挙区の場合も、表 11 からわかるように 1900 年総選挙から 1910 年 12 月の総選挙までは保守党と自由党の争いに終始し、労働党は候補者を擁立することができなかった。1911 年の補欠選挙になって初めて労働党は候補者を立て、25% 程度の得票を得たものの敗北した。1918 年総選挙になって連立派保守党と連立派自由党の候補者に対して、労働党と非連立派自由党から 1 人ずつ候補者が擁立されたがいずれも落選、1922 年総選挙と 1923 年の総選挙でも自由党候補二人と労働党候補が立候補したが皆敗北した。

サザンプトン選挙区でも表 12 に掲出されている通り、1900 年から 1910

表 10 ブライトン選挙区の党派別得票数
1900 年－1910 年 12 月総選挙

年	保守党 1	保守党 2	自由党 1	自由党 2	労働党 1	労働党 2	その他 1	その他 2
1900	7858 (40.9)	6626 (34.6)					4693 (24.5)	
1905 補選	7392 (47.4)		8209 (52.6)					
1906	8188 (23.8)	8176 (23.8)	9062 (26.4)	8919 (26.0)				
1910. 01	11625 (30.4)	11567 (30.3)	7506 (19.7)	7472 (19.6)				
1910. 12	10780 (30.8)	10757 (30.8)	6723 (19.2)	6699 (19.2)				
1911 補選	unopposed							
1914 補選	unopposed							
1918					8971 (10.8)	8514 (10.3)	32958 (39.7)	32561 (39.2)
1922	28549 (32.0)	26844 (30.0)	22059 (24.7)				11913 (13.3)	
1923	30137 (26.8)	29759 (26.5)	17462 (15.5)	16567 (14.7)	9545 (8.5)	9040 (8.0)		

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) および F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各党派の得票率を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。unopposed は無投票当選を示す。
4. 1900 年のその他候補は、無所属の候補を指す。
5. 1918 年のその他候補 1 は、連立派保守党候補 G. C. Tyron、その他候補 2 は二人目の連立派保守党候補 C. Thomas-Stanford を指す。
6. 1922 年のその他候補は保守系無所属候補を指す。
7. 1910 年 12 月総選挙と 1918 年総選挙は全く異なった選挙制度のもとで行われた総選挙であるため、両者の間に一線を画して表記している。

表 11 オルダム選挙区の党派別得票数
1900 年—1910 年 12 月総選挙

年	保守党 1	保守党 2	自由党 1	自由党 2	労働党	その他 1	その他 2
1900	12931 (25.3)	12522 (24.5)	12947 (25.3)	12709 (24.9)			
1906	11989 (20.9)	11391 (19.8)	17397 (30.3)	16672 (29.0)			
1910. 01	13462 (21.0)	12577 (19.6)	19252 (30.0)	18840 (29.4)			
1910. 12	13440 (22.1)	13281 (21.9)	17108 (28.1)	16941 (27.9)			
1911 補選	12255 (40.4)		10623 (35.0)		7448 (24.6)		
1918			9323 (12.1)		15178 (19.6)	26254 (34.0)	26568 (34.3)
1922	23200 (26.2)		9812 (11.1)	6186 (7.0)	24434 (27.7)	24762 (28.0)	
1923	15819 (17.7)	13894 (15.6)	20681 (23.2)	17990 (20.1)	20939 (23.4)		

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) および F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各党派の得票率を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。
4. 1918 年のその他候補 1 は連立派自由党の Sir A. W. Barton を、その他候補 2 は連立派保守党に所属する E. R. Bartley-Denniss を示す。
5. 1922 年のその他候補 1 は、国民自由党の候補 Sir E. W. M. Grigg を指す。
6. 1910 年 12 月総選挙と 1918 年総選挙は全く異なった選挙制度のもとで行われた総選挙であるため、両者の間に一線を画して表記している。

年 12 月総選挙までやはり労働党の候補は擁立されていない。この選挙区でも 1918 年総選挙になって初めて連立派自由党候補と保守党の候補に対して労働党から二人の候補が出馬した。だが 10% 前後の得票しか取れずに惨敗している。1922 年総選挙でも労働党が候補を一人に絞って出馬したが、16% あまりの得票率で敗退。1923 年にも労働党から二人の候補が出馬したが、

表 12 サザンプトン選挙区の党派別得票数
1900 年－1910 年 12 月総選挙

年	保守党1	保守党2	自由党1	自由党2	労働党1	労働党2	その他1	その他2	その他3
1900	6888 (29.4)	6253 (25.0)	5575 (23.9)	4652 (19.9)					
1906	5754 (21.5)	5535 (20.7)	7032 (26.4)	6255 (23.4)			2146 (8.0)		
1910. 01	7874 (23.6)	7841 (23.5)	8878 (26.5)	8830 (26.4)					
1910. 12	7551 (23.6)	7535 (23.5)	8496 (26.5)	8449 (26.4)					
1917 補選				unopposed					
1918	15548 (21.0)				7828 (10.6)	6776 (9.2)	26884 (36.4)	16843 (22.8)	
1922	22054 (23.9)	20351 (22.0)			14868 (16.1)		11576 (12.5)	9318 (10.1)	14193 (15.4)
1923	20453 (20.0)	20249 (19.8)	13724 (13.5)	13657 (13.4)	17208 (16.9)	16679 (16.4)			

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) および F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各党派の得票率を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。unopposed は無投票当選を示す。
4. 1900 年の保守党候補 2 は、自由統一党の候補である。
5. 1906 年のその他候補は社会民主連盟 (SDF) の候補である。
6. 1918 年のその他候補 1 その他候補 2 は、いずれも連立派自由党に所属する候補である。
7. 1922 年のその他候補 1 その他候補 2 は、国民自由党に属する候補である。その他候補 3 は無所属候補である。
8. 1910 年 12 月総選挙と 1918 年総選挙は全く異なった選挙制度のもとで行われた総選挙であるため、両者の間に一線を画して表記している。

得票は 17% に届かずに敗れている。労働党は 20 年代に徐々に得票を増やしているものの、やはりエドワード時代の基盤の脆弱さを克服しきれなかったと考えられる。

これに対してブラックバーンとサンダーランドの選挙区では、第一次大戦

表 13 ブラックバーン選挙区の党派別得票数
1900 年－1910 年 12 月総選挙

年	保守党 1	保守党 2	自由党 1	自由党 2	労働党 1	労働党 2	その他 1	その他 2
1900	11247	9415			7096			
1906	10291	8932	8892		10282			
1910. 01	9307	9112	12064		11916			
1910. 12	9814	9500	10754		10762			
1918					15274		32076	30158
1922	28280		8141		24049	23402	27071	
1923	28505		31117		25428	21903		

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) および F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各党派の得票率を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。
4. 1918 年のその他候補 1 は、1910 年総選挙では自由党から出馬し、今回は連立派自由党から立候補した Sir H. Norman を示し、その他候補 2 は、連立派保守党の候補であった。労働党候補は、反戦的な姿勢で知られた P. Snowden である。
5. 1922 年のその他候補 1 は、1918 年には連立派自由党候補だったが、今回は国民自由党から立候補した Sir H. Norman を示す。1910 年 12 月総選挙と 1918 年総選挙は全く異なった選挙制度のもとで行われた総選挙であるため、両者の間に一線を画して表記している。

前から自由党と労働党が協力して議席を分け合うというパターンが確立していた。まずブラックバーン選挙区の戦況をみてみよう。表 13 からわかるようにブラックバーン選挙区では自由党が大勝した 1906 年総選挙でもすでに自由党と労働党の候補がペアになって戦っており、労働党候補が自由党候補よりも票を多く集めて議席を獲得していた。その意味で早くから労働党が議席を競う力を持っていた選挙区であったことが分かる。そして 1910 年 1 月、

表 14 1910 年 12 月総選挙ブラックバーン選挙区における二票制の分析

	単独	保守党 1 との組み票	保守党 2 との組み票	自由党 との組み票	労働党 との組み票	計
保守党 1	54 (0.55)		9262 (94.38)	307 (3.13)	191 (1.95)	9814 (100.00)
保守党 2	46 (0.48)	9262 (97.49)		95 (1.00)	97 (1.02)	9500 (100.00)
自由党	327 (3.04)	307 (2.85)	95 (0.88)		10025 (93.22)	10754 (100.00)
労働党	449 (4.17)	191 (1.77)	97 (0.90)	10025 (93.15)		10762 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

表 15 1918 年総選挙ブラックバーン選挙区における二票制の分析

	単独	その他 1 との組み票	その他 2 との組み票	労働党 との組み票	計
その他 1	1199 (3.74)		28856 (89.96)	2021 (6.30)	32076 (100.00)
その他 2	1043 (3.46)	2856 (9.47)		259 (0.86)	30158 (100.00)
労働党	12994 (85.07)	2021 (13.23)	259 (1.70)		15274 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。
4. その他 1 は連立派自由党 Norman、その他には連立派保守党 Dean、労働党は Snowden を指す。

表 16 1922 年総選挙ブラックバーン選挙区における二票制の分析

	単独	保守党 との組み票	自由党 との組み票	労働党 1 との組み票	労働党 2 との組み票	その他 との組み票	合計
保守党	1510 (5.34)		1385 (4.90)	493 (1.74)	639 (2.26)	24253 (85.76)	28280 (100.00)
自由党	1652 (20.29)	1385 (17.01)		2074 (25.48)	1095 (13.45)	1935 (23.77)	8141 (100.00)
労働党 1	71 (0.30)	493 (2.05)	2074 (8.62)		21154 (87.96)	257 (1.07)	24049 (100.00)
労働党 2	189 (0.81)	639 (2.73)	1095 (4.68)	21154 (90.39)		325 (1.39)	23402 (100.00)
その他	301 (1.11)	24253 (89.59)	1935 (7.15)	257 (0.95)	325 (1.20)		27071 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。
4. 労働党 1 は Davies、労働党 2 は Porter、その他は国民自由党 National Liberal の Norman を指す。

1910 年 12 月の総選挙では自由党と労働党が協力して議席を分け合うことに成功していた。ブラックバーンもまたエドワード時代の自由党と労働党の密接な協力関係を象徴した選挙区の一つであった。

しかし 1918 年の総選挙では、1910 年の 12 月総選挙で議席を得た自由党の議員ノーマン (Sir H. Norman) が、連立派の自由党の候補 (表 13 のその他 1 候補) として立候補し当選している。一方 1906 年から議席を獲得してきた労働党の議員スノーデン (P. Snowden) は、1918 年総選挙では連立派 2 候補の票数のおよそ半分しか取れなかった。スノーデンは、連立政権に与していないというだけではなく反戦派として有名な労働党議員の一人であったため、戦勝熱に浮かされた 1918 年総選挙では大きく票を減らすことになったと考えられる。表 14、15、16 はブラックバーン選挙区における二票制の投票記録の分析結果であるが、これを見ると 1910 年総選挙で見られた

表 17 サンダーランド選挙区の党派別得票数
1900 年－1910 年 12 月総選挙

年	保守党 1	保守党 2	自由党 1	自由党 2	労働党 1	労働党 2	その他 1
1900	9617 (25.7)	9566 (25.6)	9370 (25.1)		8842 (23.6)		
1906	7879 (18.7)	7244 (17.2)	13620 (32.2)		13430 (31.9)		
1910. 01	12270 (26.0)		11529 (24.4)		11058 (23.4)		12334 (26.2)
1910. 12	11300 (23.6)	10132 (23.2)	11997 (27.4)		11291 (25.8)		
1918	25698 (40.8)				9603 (15.3)		27646 (43.9)
1920 補選			5065 (12.0)		14379 (34.0)		22813 (54.0)
1922	28001 (25.0)	24591 (22.0)	13036 (11.7)		13683 (12.2)	13490 (12.1)	19058 (17.0)
1923	23497 (19.9)	23379 (19.8)	22438 (19.0)	22034 (18.6)	13707 (11.6)	13184 (11.1)	

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) および F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1918-1949* (Parliamentary Research Services, Chichester, 1983) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各党派の得票率を示す。
3. 網掛けは当選者を示す。
4. 1910 年のその他候補は保守系の無所属候補である。
5. 1918 年のその他候補は、1910 年 12 月総選挙では自由党から立候補していたが、今回は連立派自由党から立候補した Sir H. Greenwood を示す。
6. 1920 年補欠選挙のその他候補は、1918 年に連立派自由党候補として出馬し当選した Sir H. Greenwood を指す。
7. 1922 年のその他候補は、1918 年に連立派自由党候補として出馬し当選、続けて補欠選挙でも当選したが、今回は国民自由党から立候補した Sir H. Greenwood を指す。
8. 1923 年の自由党候補 2 は、1922 年に国民自由党から立候補した Sir H. Greenwood を指す。
9. 1910 年 12 月総選挙と 1918 年総選挙は全く異なった選挙制度のもとで行われた総選挙であるため、両者の間に一線を画して表記している。

表 18 1910 年 12 月総選挙サンダーランド選挙区における二票制の分析

	単独	保守党 1 との組み票	保守党 2 との組み票	自由党 との組み票	労働党 との組み票	計
保守党 1	113 (1.10)		9938 (96.49)	192 (1.86)	57 (0.55)	10300 (100.00)
保守党 2	104 (1.03)	9938 (98.09)		66 (0.65)	24 (0.24)	10132 (100.00)
自由党	717 (5.98)	192 (1.60)	66 (0.55)		11022 (91.87)	11997 (100.00)
労働党	188 (1.67)	57 (0.50)	24 (0.21)	11022 (97.62)		11291 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を％で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。

表 19 1918 年総選挙サンダーランド選挙区における二票制の分析

	単独	保守党 との組み票	労働党 との組み票	その他 との組み票	計
保守党	8754 (34.06)		4791 (18.64)	15858 (61.71)	25698 (100.00)
労働党	3726 (38.80)	4791 (49.89)		1086 (11.31)	9603 (100.00)
その他	6997 (25.31)	15858 (57.36)	1086 (3.93)		27646 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を％で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。
4. その他候補は連立派自由党の候補 Sir H.Greenwood を指す。

自由党と労働党の支持者の極めて強固な結束は、1918 年では跡形もなく 1922 年でも国民自由党や自由党と労働党の支持者は、かつてのように結束しておらず、ほとんど重ならなくなっていることがわかる。この選挙区で

表 20 1922 年総選挙サンダーランド選挙区における二票制の分析

	単独	保守党 1 との 組み票	保守党 2 との 組み票	自由党 との 組み票	労働党 1 との 組み票	労働党 2 との 組み票	その他 との 組み票	合計
保守党 1	561 (2.00)		23192 (82.83)	1127 (4.02)	332 (1.19)	381 (1.36)	2408 (8.60)	28001 (100.00)
保守党 2	289 (1.18)	23192 (94.31)		195 (0.79)	150 (0.61)	416 (1.69)	349 (1.42)	24591 (100.00)
自由党	2132 (16.35)	1127 (8.65)	195 (1.50)		673 (5.16)	608 (4.66)	8301 (63.68)	13036 (100.00)
労働党 1	227 (1.66)	332 (2.43)	150 (1.10)	673 (4.92)		11676 (85.33)	625 (4.57)	13683 (100.00)
労働党 2	138 (1.02)	381 (2.82)	416 (3.08)	608 (4.51)	11676 (86.55)		271 (2.01)	13490 (100.00)
その他	7104 (37.28)	2408 (12.64)	349 (1.83)	8301 (43.56)	625 (3.28)	271 (1.42)		19058 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。
4. その他候補は国民自由党から出馬した Sir H. Greenwood を指す。

は、エドワード時代の自由党と労働党の蜜月関係は、1918 年総選挙で大きく崩れ、その後労働党と自由党との協力関係はかつてのように復活することはなかった。

おそらくエドワード時代から第一次大戦後の労働党と自由党の関係の劇的な変化を最も鮮やかに示しているのが最後にとりあげるサンダーランド選挙区である。この選挙区では表 17 で分かる通り 1900 年から労働党の候補が出馬し 1906 年には早くも議席を獲得している。1910 年 1 月総選挙では労働党は議席を逸したが 1910 年 12 月の総選挙では自由党と議席を分け合っている。その意味でサンダーランド選挙区もエドワード時代の自由党と労働党の同盟関係が機能していた選挙区だということができる。

しかしこの選挙区では、1918 年総選挙で、現職の自由党議員グリーンウ

表 21 1923 年総選挙サンダーランド選挙区における二票制の分析

	単独	保守党 1 との 組み票	保守党 2 との 組み票	自由党 1 との 組み票	自由党 2 との 組み票	労働党 1 との 組み票	労働党 2 との 組み票	合計
保守党 1	145 (0.62)		22865 (97.31)	143 (0.61)	167 (0.71)	116 (0.49)	61 (0.26)	23497 (100.00)
保守党 2	177 (0.76)	22865 (97.80)		146 (0.62)	129 (0.55)	50 (0.21)	12 (0.05)	23379 (100.00)
自由党 1	545 (2.43)	143 (0.64)	146 (0.65)		20750 (92.48)	495 (2.21)	359 (1.60)	22438 (100.00)
自由党 2	435 (1.97)	167 (0.76)	129 (0.59)	20750 (94.17)		300 (1.36)	253 (1.15)	22034 (100.00)
労働党 1	296 (2.16)	116 (0.85)	50 (0.36)	495 (3.61)	300 (2.19)		12450 (90.83)	13707 (100.00)
労働党 2	49 (0.37)	61 (0.46)	12 (0.09)	359 (2.72)	253 (1.92)	12450 (94.43)		13184 (100.00)

注

1. 出典：F. W. S. Craig edited, *British Parliamentary Election Results 1885-1918* (Parliamentary Research Services, second edition, 1989) より作成。
2. 数字は候補者の得票数を、括弧内の数字は各候補の得票に占める各カテゴリーの得票数の割合を%で示す。
3. 網掛けは当選者を示す。
4. 自由党候補 2 は、1918 年には連立派自由党から、1922 年には国民自由党から立候補した Sir H. Greenwood を指す。

ッド (Greenwood) が連立派自由党から立候補し、非連立派自由党が候補を立てなかったため、労働党が連立派自由党と保守党の候補者に対抗して出馬したものの議席に届かなかった。1920 年の補欠選挙でも連立派自由党の候補に対抗して労働党から候補が立ったが敗北、1922 年の総選挙 1923 年の総選挙でもいずれも労働党から二人の候補が出馬しているが議席を逸している。

表 18、19、20、21 は 1910 年 12 月、1918 年、1922 年、1923 年の総選挙におけるサンダーランド選挙区の 2 票制の票の行方を分析したものである。表 18 に示されているように、1910 年 12 月には自由党と労働党の組み票は、自由党の側で 92% 労働党の側では 98% の水準に達しており、エドワード時

代の両党の支持層の強固な結束が見て取れる。しかし表 19 から分かるように、1918 年総選挙では「その他」の連立派自由党の候補と労働党の組み票は極めて少なく、連立派自由党の側ではわずかに 4% 程度に過ぎない。一方連立派自由党と保守党との組み票は連立は自由党の側では 57%、保守党の側では 62% 余りになっており、かつての自由党と労働党の強固な結束は崩壊して連立派の自由党と保守党の結束がそれに取って代わったことが分かる。さらに表 20 から判明するように、労働党が二人の候補者を立てた 1922 年の総選挙では労働党の二人の候補の組み票がそれぞれ 85% と 87% あまりに達する一方、自由党の候補および「その他」の国民自由党の候補と労働党の候補の組み票は、労働党の側ではわずかに 1% と 3% と自由党国民自由党の側でも 5%2% 程度に低下してしまっている。表 21 に示した 1923 年の総選挙でも、二人の自由党候補と二人の労働党候補の間の組み表は労働党の側では最大でも 4% 程度に過ぎず、自由党の側ではさらに低く 1% から 2% にすぎない。こうした組み票の割合の劇的な変化は、1910 年 12 月選挙から 1918 年選挙を経て、自由党と労働党がエドワード時代の相互に補完しあった盟友関係から、真正面から対決する関係へと決定的な変貌を遂げたことがまざまざと表されている

4

以上の分析から、1918 年総選挙で労働党が議席に届かなかった二人区における労働党の主な敗因が浮かび上がる。第一に、エドワード時代に自由党ないし労働党の勢力が弱く、両者の同盟関係が十分機能していなかった選挙区では労働党はそもそも議席を争うほどの基盤を持っていなかった。ロンドンのシテイ、ブライトン、オルダム、サザンプトンがそれである。第二に、エドワード時代の革新主義同盟は機能していたが、自由党、労働党の議員が、1918 年総選挙では連立派に走ったことによって、その遺産が連立派に奪われ、非連立派の自由党、労働党が基盤を引き継ぐことができなかった選

挙区があった。ストックポート、ノレッジ、そしてサンダーランドもこのカテゴリーといって良い。第三は、エドワード時代の自由党と労働党の同盟は機能していたものの、1918 年総選挙で反戦派の候補が労働党の候補であったため、票を大きく減らしてしまった選挙区である。ブラックバーンがこれにあたる。

このような戦況の分析からは、少なくともこうした二人区については、労働党が前進する基盤になったのは、やはりエドワード時代の自由党との連携で築いてきた基盤を、引き継げたかどうかという点にあったと思われる。これが継承されるのに成功した選挙区では、労働党はやがて自由党にかわって保守陣営に対抗する政党に育ってゆく。この基盤が脆弱であった選挙区では、労働党の展望は限られていた。

しかし連立派の自由党、連立派の労働党の候補がいた場合には、エドワード時代の基盤を労働党が受け継ぐのを大きく妨げた。また候補が明確な反戦派であった場合、戦勝熱が高まった 1918 年選挙では、労働党は惨敗した。愛国主義的なレトリックの労働党候補が保守層に食い込んで労働党の基盤を広げたという明確な証拠は乏しいものの、保守派、あるいは連立政権側の候補に抗して、エドワード時代の自由党と労働党の同盟関係の遺産を引き継ぐ上で、パトリオティズムは防壁になったと考えてもよいであろう。だがサンダーランドの例が示すように、連立派が活躍した選挙区では、労働党と自由党とのかつて同盟関係は、明確な敵対関係に変わっていった。こうした選挙区では、「階級政治」とよばれる現象が明確に現出してきたといっても良いであろう。

では主戦場であった一人区では同様な現象を見ることができるであろうか。これが次の分析の課題となる。

注

- 1 拙稿「自由党の分裂と労働党－1918 年総選挙二人区の戦況－」『英米研究』大阪大学英米学会、41 号 2018 年参照。多数の表を掲出するため、選挙区の社会的地

理的特性や候補者の分析についての記述や注記は、紙幅の関係からすべて割愛している点をお断りしたい。なお本稿は、19 世紀末から 20 世紀初頭に至るイギリスの選挙の歴史についての筆者の研究の一環である。筆者のこれまでの分析の試みについては以下の論考を参照されたい。「近代イギリス選挙史研究序説－第三次選挙法改正後のイギリスの政治変動」(『イギリス研究の動向と課題』、大阪外国語大学、1997 年所収)、「アイルランド自治問題とイギリス政治の転換－1886 年総選挙における自由党の分裂」(『グローバルヒストリーの構築と歴史記述の射程』、大阪外国語大学、1998 年所収)、「19 世紀末における自由党の衰退」(『国際社会への多元的アプローチ』、大阪外国語大学、2001 年所収)、「自由党の衰退と反攻－19 世紀末イギリス総選挙と補欠選挙－」(『英米研究』、大阪外国語大学英米学会、2004 年所収)、「1906 年総選挙と自由党の再生－20 世紀初頭の補欠選挙と 1906 年総選挙における対決の構図－」(『英米研究』第 30 号、大阪外国語大学英米学会、2006 年所収)、「1906 年総選挙における自由党の再生と労働党－二人区の得票分析－」(『英米研究』第 31 号、大阪外国語大学英米学会、2007 年所収)、「1906 年総選挙における自由党の選挙基盤－一人区の得票分析」(『英米研究』第 32 号、大阪大学英米学会、2008 年所収)、「自由党政権下の補欠選挙－続ぶる自由党の基盤 1906 年～1909 年－」(『英米研究』第 33 号、大阪大学英米学会、2009 年所収)、「20 世紀初頭自由党政権下の社会政策と選挙政治－1906 年～1910 年 1 月－」(杉田編『日米の社会保障とその背景』、大学教育出版、2010 年所収)、「危機の時代の自由党－補欠選挙 1911 年～1914 年」(『英米研究』第 35 号、大阪大学英米学会、2011 年所収)。「憲政危機と勝利の陥穽－1910 年 1 月総選挙と 12 月総選挙－」(『英米研究』第 36 号、大阪大学英米学会、2012 年所収)、「投票率と 1910 年総選挙」(『英米研究』第 37 号、大阪大学英米学会、2013 年所収)、「第一次大戦下の補欠選挙 1915～1918－総力戦の衝撃－」(『英米研究』第 38 号、大阪大学英米学会、2014 年所収)、「第一次大戦下のサルフォード北補欠選挙と自由党の衰退」(『英米研究』第 39 号、大阪大学英米学会、2015 年所収)、「1918 年総選挙と自由党・労働党－一人区における政党の対決の構図」(『英米研究』第 40 号、大阪大学英米学会、2016 年所収)、「1918 年総選挙と自由党・労働党－二人区における政党の対決の構図」(『英米研究』第 41 号、大阪大学英米学会、2017 年所収)。

- 2 1885 年の自由党の分裂によって自由統一党 (Liberal Unionists) が結成され、19 世紀末には保守党政権に加わる。このため第一次大戦前後までは、通常自由統一党と保守党を一括して統一党 (Unionists) と呼ぶのが一般的である。ただし本稿では比較の便宜上、第一次大戦前も含め保守党と表記している。

- 3 ただし 1918 年総選挙は、それまでの第三次選挙法改正後の選挙制度とは大きく異なり、男性の普通選挙権と 30 歳以上の女性の参政権の実現によって有権者の数は一気に増え、また選挙区の区割りも変更された。従って、それまでの選挙と 1918 年以降の選挙を単純に比較することはできない。とはいえ、ここで対象としている二人区は、戦前の二人区とほぼ同じ都市を対象としており、選挙区がもつ政治的な特性という観点からみれば、一定の連続性や変化を論じることは許されるであろう。